

Title	<紹介>鈴木亨著『近世前期文学の主題と方法』
Author(s)	浜田, 泰彦
Citation	語文. 2010, 92-93, p. 126-127
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69146
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

鈴木亨著『近世前期文学の主題と方法』

浜田泰彦

本書は、鈴木氏の一九五八—二〇〇五年の約半世紀にわたり発表された論考及び講演録（憂き世と浮き世—価値観の対立と融合—）全三部二十本を収載する。

第一部「仮名草子の思想的探求」は全体の六割を占め、本書の主要部分となっている。

従来、仮名草子が「未分化の系譜」（水田潤氏）と評されるほど多様な要素を有する作品群であるために、作風や内容による分類研究に主眼が置かれてきたが、氏はその弊害として、「作品は全体として把握されず、特定の部分がその作品の本質として分類の対象となり、同時にそれが作品研究の基礎認識となることが多かった」（一九四頁）傾向にあったと指摘し、思い込みを排除し、作品本文に精緻な読解を試みる姿勢で一貫している。

たとえば、通常排仏論を標榜する『清水物語』に対し、儒仏一致論で反駁した『祇園物語』という対立図式で把握されがちな両作品を、氏は『清水』が封建道徳を保守し「合理主義の限界をまざ／＼と見せ」つけるのに対し、『祇園』は「人間の能力を浪漫的に考え」、「その思考が不可知論的な範囲まで展開」（三〇六頁）すると、思考態度の違いから比較する図式に置き換えている（『祇園物語』小考）。また、『二人比丘尼』が『曾我物語』巻十

一—十二で死んだ夫を弔って妻が出家するストーリーの骨組みを借りているとの典拠の指摘（『曾我物語』と『二人比丘尼』）、『為愚痴物語』が蓄財を容認し貪欲に墮することさえなければ仏道修行と両立するという論理で、当代の商業資本主義と旧来の道徳観との中道をはかっているとの指摘（『為愚痴物語』の中道思想）は、いずれも氏の精緻な読解にかかるものだと言える。その他紹介しきれないが、『恨の介』・『薄雪物語』・『仁勢物語』・『可笑記』・『竹斎』・『浮世物語』・『一休咄』・『あだ物語』をとりあげた諸論考でも、氏の鋭利な読みの成果が提示されている。

続く第二部「井原西鶴諸作品の考察」においても、「少年期の世之介」・「青年期の世之介」の二論考では、第一部と同様、性的な早熟を見せる世之介の少年期から、現実的問題に対峙することになる青年期まで『好色一代男』巻一—二の各話の分析検討を詳細に行っている。さらにその続編『諸艶大鑑』に対しては、「誓紙は異見のたね」（巻一—二）の詳細な分析を通して、従来遊里の現実的苦難を描いた作品という解釈に代わる読み方として、遊興の「かぎり」を知って留まるという主題を新たに提出する（「ほれぬ」という誓紙）。『西鶴の養生の理念』で、致富道を主題とするはずの『日本永代蔵』において、養生論が頻出する理由として、『為愚痴物語』の介在を指摘したのも、氏が仮名草子作品を精読してきた成果の一つであろう。

一方で疑問の残る論考もあった。「西鶴の改作方法」では、『万の文反古』巻四—「南都の人が見たも真言」、巻三—「明け

て驚く書置箱」が各々、行方不明の夫が帰還する展開で共通する『懐硯』巻一ノ四「案内しつてむかしの寝所」、遺産をめぐる家族の騒動を描く同作巻二ノ一「後家に成ぞこなひ」を再利用・改作したものであるとの視点に立脚し、比較分析を行っている。氏は、両者の改作態度に「旧作に対する厳しい批判と反省」（四五九頁）を見ているが、もとより人心の諸相を描出した西鶴にあって、酷似した設定に異なる展開が与えられるのは当然で、旧作への批判や反省によるものとは限らないのではあるまいか。なお、相統争いを題材とした話としては『本朝二十不孝』「親子五人仍書置如件」（巻二ノ四）も比較検討されてよかったのではないかとも思われる。

最後に第三部「研究余滴」では、『万葉集』・『三人法師』・『去来抄』・『春雨物語』・『菅原伝授手習鑑』と、時代やジャンル区分を越えた諸作品が縦横に分析されている。全ての論を紹介したいところだが、『菅原伝授手習鑑』四段目切「寺小屋」で、松王が引用した父の歌にある「何とて」という語句を反語的解釈と受け止めて「心の抛り所」としていた（五八八頁）、という指摘（重層構造の展開）等微細な表現も疎かにしない鋭い読解がここでも行われていることを掲出すれば充分であろうか。

冒頭に紹介した通り、本書は約半世紀以前の論考を掲載している。時間が経過し、研究動向もさまざまに変化してきているにもかかわらず、正確な本文理解は普遍のものであると、改めて感服した一書であった。

（和泉書院、二〇〇八年八月、六一〇頁、一五、七五〇円）

（はまだ・やすひこ 本学大学院博士後期課程）